Ⅱ−11　［コラム］うつわの大変革
―湯舟坂２号墳出土の土器が示すこと―

菱田 哲郎

湯舟坂２号墳からは 200 点を超える土器が出土しており、その大半は須恵器であった。荒らされていない横穴式石室ということもあるが、土器の量の多さはこの古墳の被葬者の力を物語っている。ただし、一度に副葬されたのではなく、埋葬のたびに入れられたと考えられ、とくに奥壁近くからは最初の数回の埋葬に伴うものが片付けられていた。その後に追葬された棺に伴う土器は、石室の各所から出土しているが、それらについても前後２時期に分けられる。したがって奥壁近くのものと追葬に伴うものとは時期差があり、まとめてみると一目瞭然である。以下の写真は、写真１が奥壁周辺の資料、写真２が追葬のうち新しい一群の資料である。高杯と呼ばれる脚の高いうつわ、あるいは、ハソウと呼ばれる胴部に孔をあけた壺が小型化する様子がうかがえる。その一方で、写真２の写真の手前にある宝珠つまみが付く杯蓋のように、それまでになかった形のうつわが登場している。

湯舟坂２号墳の時代、すなわち６世紀末から７世紀前半は、うつわにおいて大きな変化があった時期である。身に立ち上がりがつく杯と蓋とが合子のように合わさる蓋杯のセットが古墳時代の伝統的な食器であったのが、宝珠つまみが付く蓋とシンプルな身のセットへと大きく変化した。新しいうつわは、金属器を模倣したことからはじまり、その後の社会で主流となっていった。湯舟坂２号墳の出土品には、その金属のうつわ銅鋺もあり、それを模して生まれた新しい器形が数多く存在する。これら、銅鋺と新たな須恵器のうつわを写真３では集合させてみた。新しい時代の息吹が感じられるようである。（写真はいずれも栗山雅夫氏撮影）

写真１　奥壁から出土した須恵器

写真２　追葬（新相）に伴う須恵器

写真３　銅鋺と須恵器の新出のうつわ

Ⅱ−12　［コラム］須恵器もどきの土師器
―湯舟坂２号墳からみた器の革新―

菱田 哲郎

湯舟坂２号墳出土の土師器　湯舟坂２号墳からは 200 点を超す土器が出土しているが、その大半は須恵器であり、土師器は古墳に伴うものとしてわずか４点が報告書に図示されているに過ぎない（図１）。これらのうち４は暗文を内面に施し、明確に土師器杯と評価することができるものの、他の資料については土師器と呼んでよいか疑問符が付く。１は外面に手持ちの削りをもつもので、ローカルな土師器としてもよいものであるが、２と３は回転ナデ調整を体部の内外面に残し、焼成不良の須恵器椀のように見える。実際のところ、これをひっくり返して見てみると、同じ湯舟坂２号墳出土の須恵器杯蓋と同様の調整であることがわかり、底部をヘラで切り離した後に粗い調整を施している点も共通する（図３）。ただし、器高が高く、やはり椀として作られたものであることは確かであろう。

出土位置を見てみると、４は玄門部の外側で、追葬に伴う資料であることは間違いなく、７世紀中葉に下がるとみてよい。一方、１～３は、玄室の奥に近い場所で出土し、とくに２は初葬時の副葬品が片付けられたと考えられる奥壁近くから出土しており、共伴する須恵器からは６世紀末から７世紀初めの年代を与えることができる。これら３点の土器を土師器と呼ぶべきかどうかは、この時代の土器の様相を踏まえて検討する必要がある。

須恵器窯におけるロクロ土師器の焼成　湯舟坂２号墳から西に峠を越えると、兵庫県豊岡市奥野・市場に至るが、ここには奥野タワタリ窯跡群と市場神無窯跡群が存在する。市場神無窯跡群が７世紀から８世紀にかけて操業し、奥野タワタリ窯跡群はそれに続く時期の操業をおこなっている（東 2021）。発掘調査がおこなわれた市場神無窯跡群の北群では、７世紀初めから

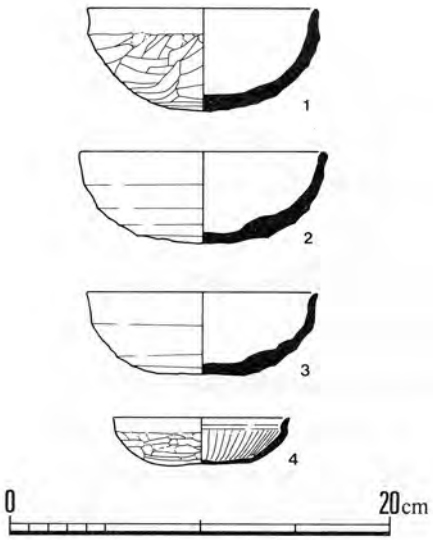

図１　湯舟坂２号墳の土師器（奥村編 1983）

図２　湯舟坂２号墳の土師器（図 1-1・4）（栗山雅夫氏撮影）

図３　湯舟坂２号墳の土師器（図 1-2・3）（栗山雅夫氏撮影）

８世紀前葉までの須恵器窯が発見されている（潮崎 2011）。その中で注目されるのが９号窯である。長さ３ｍ足らずという小型の窯で供膳具のみ生産することに特化した窯と考えられる。出土土器からは７世紀前半に位置づけられ、窯群の中でも早い段階にあたる。壁体も通常の須恵器窯のようには還元しておらず、赤褐色に焼けた状況であった。焼成された杯類の焼成は軟質であり、いわば生焼けの須恵器を生産していたようである。ただし、小型の窯をあえて造って軟質の焼き具合の土器を焼成しているのは、土師器の焼成を意図して器を生産していたとも評価できよう。時期が下がると、こうした土器はロクロ土師器として各地で供膳具の主流を占めるようになっており、そういった現象のはしりとみることができる。

湯舟坂２号墳出土土師器のうち、２と３については、須恵器の技術が用いられた軟質の土器という点で、市場神無９号窯の製品との共通性が認められる。同窯の製品かどうかは不明であるが、こうした製品が須恵器の焼成不良品ではなく、意図して作られたロクロ土師器であることは確実視できる。そして、１についても、３と同じ場所から出土しており、製作技術こそ異なるものの、大きさや形態が共通することから、この時期を特色づける椀として理解すべきである。いずれも一定の規格の椀を志向して、土師器として製作する意図が見出せる。

器の変革期を代表する湯舟坂２号墳出土土器　初葬時の土師器がいずれも椀であったことは、この古墳の性格を考える上で興味深い。というのも、湯舟坂２号墳出土須恵器に、多くの椀が含まれるからである。出土位置からは、追葬のみならず初葬に伴っていたと考えられ、こうした器形の受容が６世紀末に遡ることが示される。蓋を伴う椀もあり、その蓋は通有の杯蓋とは異なって同時期の長頸瓶の蓋と共通する形状をとり、新しい器の創出にあたって他の器の形が借用されていることがうかがえる。こうした新しい器を積極的に取り入れている点に、湯舟坂２号墳の土器の特色があり、上述した土師器もこの脈略上に位置づけられよう。

古墳時代から飛鳥時代への須恵器の変化として食器の形が大きく変わることが知られており、それまでの合子のように蓋と身を合わせる蓋杯のセットから、つまみをもつ蓋と身のセットへと移行する。その変化に先駆けて６世紀末頃を中心に椀が登場するのも変革の重要な要素である。初期の椀の形状は統一性を欠いており、同時期の金属器を模倣したとする意見もあるものの、無蓋高杯の杯部を転用するなど、他の器形の一部を借用する場合も多く、それぞれの生産地で創意工夫が凝らされたと考えられる。この新出の椀の用途は明らかではないが、銅鋺と同じく仏具とみる見方もあり、湯舟坂２号墳で浄瓶形の須恵器が出土していることもこのことを補強する。一方、須恵器椀がいち早く、６世紀後半に登場した福岡県牛頸窯が対外関係も所管する那津官家を控えた生産地と考えられることから、対外関係を軸に食器の改革が進められたという見方も考えられる。いずれにせよ、須恵器や土師器の椀は当時の先端的な器物として重宝されたことは疑いなく、湯舟坂２号墳の被葬者像を考える重要な材料となろう。

参考文献

奥村清一郎（編）1983『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会
潮崎誠 2011「市場神無遺跡群の調査成果」『但馬史研究』34 号
東昭吾 2021『豊岡市須恵器窯跡分布調査報告書Ⅰ』
山本暸平 2023「須恵器椀について」『上園遺跡 11』大野城市教育委員会
＊市場神無窯跡群について仲田周平氏（豊岡市教育委員会）からご教示をえた。

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2